

私の学生時代

思い出の寮生活

喜多一二郎

寮生活

私の学生時代は大正元年の中学入学から大正十年春大学を卒業するまでの間である。當時中学を普通部と称していたが生徒の半数以上が寮生であつて学内総ての部門において寮生が主動権を握っていた。寮は大は五、六十人から小は二、三十人位の収容で北寮地内には前寮、後寮、五寮があり、東寮地内には三寮、四寮、七寮があり、西寮地内には十二寮、

八寮、十寮があつた。八寮、十寮は大学生の小さい寮だつたように思っている。十二寮は退校一步手前の悪童共の収容所のようなものだった。自分もその一人であつたが……。

大正二年頃迄はランプで、毎夕門衛の小母さんから一合二銭で石油を買うのが例であつた。電灯がつけられたときの寮生の喜びは大變なもので一晩中電灯を眺めていたことを覚えてゐる。寮は午後六時門限で六時より各寮に輪読会が開かれ、寮生が交替で聖書朗読・祈祷・讃美歌という具合だつた。七時より九時まで自習時間、九時半彰栄館の鐘の音とともに就寝するのであつた。

寮ではその寮出身の大学生が寮長となり全権を持つて指導していた。今から思うと當時二十三、四の学生が良くもまともに行つたものだと思うが、その反面いかにも老成ぶり、クリスチャンを鼻にかけたような青年らしくない人間が多く、私は胸糞が悪かつた。

同志社普通部は授業の始め五、六名位が前のところを質問されるので良く勉強した。寮では規律が嚴重で、朝は上級生の夜具を仕舞い、掃除するのが役目で(夜もまたしかり)あり、かつ平常の態度を喧かましく批判さ

れ、学生としての誇りとクリスチャンらしき行動を強いられた。

彰栄の鐘は寮生活をした者に取つて忘れることの出来ぬものである。朝の鐘、晩の鐘はがらんがらんと長く響き、相国寺の森にこたまして少年寮生の郷愁を誘ひ幾度か涙したものであつた。

かつて父が上洛して夜の九時半頃京都駅へつくこととなり駅へ出けた。京都駅の近くまで行つたとき嚴冬の夜空にかすかに彰栄の鐘が響いて來た。自分は静かな駅前に立つて遙かに聞える鐘の音を不思議な氣持で鳴り終るまで聞いた深い思い出がある。

あまり好きでなかつた寮生活、輪読会、毎年早曉若王子山頭の墓參などが自分の一生の性格を育成する大きな力となつてゐることは否めない。

遠足

大正の初め頃、各寮とも日曜日は寮生こぞつて遠足に出かけた。主として比叡、鞍馬、愛宕山などであり病人以外一人として寮に居残る者もなかつた。竹の皮の握り飯に草鞋履きであつた。夕方、寮の玄関に履きつぶした草鞋を積上げてその高さを以つて寮の志氣を



クラーク・メモリアルホール裏の碑

示すものとして誇ったのである。
ボートに行く者は山科街道か山中越で大津の尾花川の艇庫まで歩いて往復した。少し金のあるときは帰途疏水を舟で帰った。今の人には想像もおよばぬことであろう。当時ボート部の部長は福井大三郎先生で艇の掃除を喧しくいわれたことを覚えている。

また当時、五年生をリーグとして杜寺の見学探訪をしたものである。その一人に梅原（末治）氏があり、詳細なパンフレットを作り、懇切に説明していたことを記憶している。後に彼が考古学の大家となったことは周知の事実である。

ラグビー、ボート、野球、テニスなども大正の始めは運動部として組織立ったものではなく、同好者の集りのような梅塩だったが、大正三年頃、大学野球部が組織され、大学の野球では吉田、平田、三宅、河原などの人達が中心となり、東京へ遠征して早大、慶応と善戦したことを覚えている。ラグビーは同三年頃大脇兄弟、露無、美濃部、若槻、三沢などの名選手が出て慶応、三高、神戸クリケット、横浜外人倶楽部と定期的に試合を始めた。初め赤黒ダンダラのユニホームを作り、始めて着たユニホームで大喜びしたものが、それが慶応と同じものと判り、大脇氏が英国から見本を取り寄せ決定したのが今の紫紺と空色のダンダラのユニフォームである。その際取寄せたラグビーの靴が今につたわっている。大脇氏は人物・技術ともに日本一の名選手と自他ともに許していた。

同志社ボーイはハイカラ

同志社ボーイはオシャレでハイカラだった。他校生に比しスマートだった。他校のような腰にタオル、破帽、朴下駄という穢い学生は一人も見当らなかった。何れも少し高めのカラーで、ズボンは筋目正しく、靴も良く磨きキチンとしていた。その理由は、(1)同志社学生は常に紳士として学校から扱われた。(2)外人教師が多かった。(3)同志社女学校が隣りにあり学校の会合に同席することが多かった(4)外人教師宅にアルバイトする者が多かった(5)外人の子弟が常に二、三人在学した。(6)割合富裕家庭の子弟が多かった等々が原因だと思っている。

大正六年五月、予科の帽子の形を定める予科全体会議があった。私は昼食後有終館の大講義室に行ってみると丸帽に白線二本入れることに決定した後だった。自分は驚いて同出身者二、三名で官立の真似をして白線帽を被りたい者は直に官学へ行け、同志社には同志社のカラーがある。官学のまねをして笑われたくないと抗議したところ、幸いに入られて予科の帽子は慶応と同じに決定したことも思い出の一つである。

(大正一〇・大経卒)